

# 香川県埋蔵文化財調査年報

昭和 56 年度

1982. 3

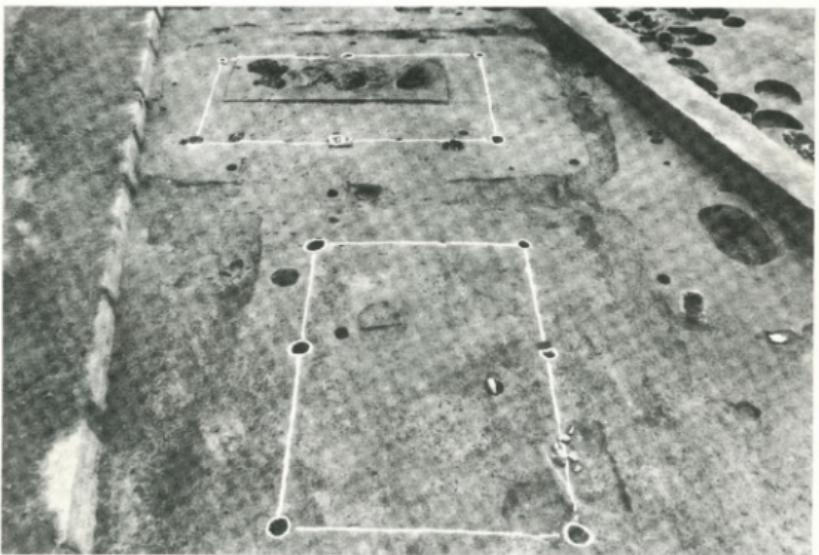
香川県教育委員会



天龙城跡航空写真



秦汉三彩·金铜·铜制品 (56年度)



据立柱群 (西村遗址)

## 目 次

### グ ラ ピ ア

昭和 56 年度における埋蔵文化財調査の概況	2
埋蔵文化財調査位置図	3
発掘調査・立会調査一覧表	4
西方遺跡 C <sub>2</sub> 地区	6
大浦浜遺跡	9
西村遺跡Ⅱ	15
中の池遺跡	19
讃岐国府跡	22
石田高校校庭内遺跡	27
讃岐国分寺跡	32
天霧城跡	36
黒島林 7 号・8 号墳	39
羽佐島遺跡	47
第 4 回埋蔵文化財発掘調査報告会	52
文化行政課埋蔵文化財調査担当者名簿	54

## 昭和56年度における埋蔵文化財調査の概況

今年も発掘調査は、2件の受託事業をはじめ、緊急・確認調査を併せて合計21件、遺跡数にして22ヶ所にのぼり、依然として、多くを数えている。

種別についてみると、受託事業2件、国庫補助による重要遺跡確認調査2件、緊急調査8件、確認調査9件となった。

まず、国庫補助事業として調査したのは、讃岐国府跡と、中の池遺跡である。讃岐国府跡の調査は、5ヶ年計画の最終年次にあたり、国府城の北辺を確認するため「大町」「柳田」の地名が残っているあたりを発掘した。発掘により出土した墨書土器が何を語りかけてくれるか、今後に期待するものである。

また、丸亀市が事業主体となり、弥生遺跡として注目されていた中の池遺跡の調査が実施され、環濠を伴う住居跡であることが確認された。

受託事業については、瀬戸大橋架橋工事に伴う調査が、今年も継続的に行われた。昭和51年度の予備調査、52年度の本格調査開始から実に5年の歳月を経た。その間、8万m<sup>2</sup>の広がりをもつ遺跡を発掘した。発掘調査の終わった所に、工事用道路がつき、橋脚工事は急ピッチで進み、備瀬瀬戸は日毎にその様相が変化している。

西村遺跡も四国地方建設局の委託を受けて総延長1km、幅30mの範囲を調査し、中世集落跡の状況確認をした。54年度からはじまった調査事業も57年3月25日をもって完了した。

土木工事に伴う緊急調査については、西讃の雄、香川氏の牙城、天霧城跡の東にのびた8つの郭が採石により損壊することになった。土塁や石垣、空堀などが遺存していた。保存の方向で協議を重ねたが、7つの郭が採石の対象となった。残りの部分については、国指定をして保存をする方向で準備中である。

また、黒島林古墳群でも大規模土地造成が行われ、一基保存、二基が発掘調査後取り壊しとなった。

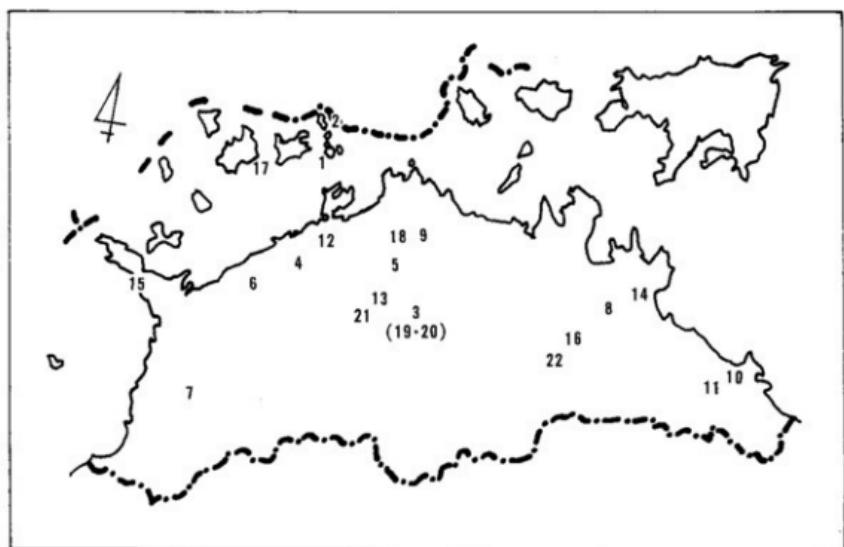
その他、石田高校での実習管理倉庫建て替えに伴う調査や埋立工事に伴う窯跡の調査など、迅速な対応を要するものであった。

また、単県事業として、継続的に実施している県下の前方後円墳の確認調査として大日山古墳と吉岡神社古墳の二基の墳丘測量図を作成した。

ことしもまた、全国から発掘の成果が報告されている。前期旧石器時代の遺跡をはじめ縄文・弥生から歴史時代にいたる数多くの遺跡の発掘がなされ、漸次学問的裏付けもされている。県下においても、例年通り多くの遺跡の発掘調査が行われ多くの成果を得た。その考古資料の一部を展示公開したところ好評を博し、県民の関心の強さを知ることとなった。

しかしながら、今年も土木工事等によって貴重な文化遺産が消滅していった。事前の発掘調査によって記録に残しあしたもののが遺跡は消えた。道路がのび、圃場整備が行われ、住宅が建ち並び、現代に生きる者にとってはたしかに生活が便利になっている。その一方では、先人が作り上げた文化遺産が次々と犠牲になっている現実がある。“開発か保存か”この大きな課題を文化財保護行政の上でどう取り組めばよいのかもう一度根本から考えなおしてみる時がいよいよ来たようだ。

## 埋蔵文化財調査位置図



- |               |            |               |
|---------------|------------|---------------|
| 1. 西方遺跡       | 9. 讀岐國分寺跡  | 17. いなだ浜製塩遺跡  |
| 2. 大浦浜遺跡      | 10. 大日山古墳  | 18. サギノクチ1号墳  |
| 3. 西村遺跡Ⅲ      | 11. 原間古墳   | 19. 西村遺跡      |
| 4. 中の池遺跡      | 12. 吉岡神社古墳 | 20. "         |
| 5. 讀岐国府跡      | 13. 打越窯跡   | 21. 池の山環状敷石遺跡 |
| 6. 天霧城跡       | 14. 雨滝城跡   | 22. 丸井古墳      |
| 7. 黒島林7号, 8号墳 | 15. 大浜遺跡   |               |
| 8. 石田高校校庭内遺跡  | 16. 大石1号墳  |               |

本文中の遺跡位置図は  
国土地理院1:25,000  
及び1:50,000の地図  
を利用した。

発掘調査

番号	名 称	遺 跡			調	
		所 在 地	種 類	時 期	原 因	原 因 者
1	西方遺跡	坂出市与島町	包 藏 地	旧 石 器	瀬戸大橋架橋工事	本四公團
2	大浦浜遺跡	坂出市櫛石	"	縄文時代～古代・中世	"	"
3	西村遺跡Ⅲ	綾歌郡綾南町陶	集 落	平安末～鎌倉	国道32号綾南バイパス工事	四国地方建設局
4	中の池遺跡	丸亀市金倉町	"	弥生時代	確 認 調 査	
5	讃岐国府跡	坂出市府中町	官 術 跡	古 代	"	
6	天霧城跡	善通寺市碎嚴	中世山城	中 世	採 石	採 石 業 者
7	黒鳥島7号・8号墳	観音寺市池尻町	円 墳	古 墳 時 代	土 地 造 成	不動産業者
8	石川高校校庭内遺跡	大川郡寒川町石田	包 藏 地	弥 生 時 代	実習管理室建設	県
9	讃岐国分寺跡	国分寺町国分	古 代 寺院跡	古 代	現 状 変 更	宝 林 寺
10	大日山古墳	大川郡大内町	前方後円墳	古 墳 時 代	確 認 調 査	
11	原間古墳	"	円 墳	"	"	
12	吉岡神社古墳	丸亀市飯野町	前方後円墳	"	"	
13	打越窯跡	坂出市府中町	窯 跡	古 墳 ～ 古 代	埋 め 立 て	埋め立て業者
14	雨池城跡	大川町・寒川町・津田町	中世山城	中 世	確 認 調 査	
15	大浜遺跡	三豊郡鈴間町大浜	包 藏 地	縄文時代	圓 舍 建 築	鈴 間 町
16	大石古墳群(第1号墳)	長尾町前山	円 墳	古 墳 時 代	圓 場 整 備	長 尾 町
17	いなだ浜製塩道遺跡	丸亀市広島江の浦	製 塩 遺 蹟	"	学 術 調 査	個 人
18	サギノクチ1号墳	坂出市加茂町	古 墳	古 墳 時 代	確 認	坂 出 市
19	西村遺跡	綾南町陶	集 落	中 世	区 画 整 理	個 人
20	"	"	"	"	水 道 管 埋 設	綾 南 町
21	池の山環状敷石遺跡	坂出市府中町南谷			道 路 工 事	労 住 協
22	丸井古墳	長尾町西字打越	古 墳	古 墳 時 代	確 認	長 尾 町

# 立会調査一覧

立会調査一覧						
面積(m <sup>2</sup> )	発掘主体	負担者	対処	文化財保護法	担当者	時期
5,700	香川県教育委員会	本四公團	発掘調査	57条の3	竹下、森本、坂口	56.4~56.8 56.11~57.1
10,000	〃	〃	〃	〃	大山、東原、安田、真鍋、白木、町川、田村	56.4.6 57.3.25
6,400	〃	四国地方建設局	〃	〃	広瀬、林、大砂古、玉城	56.4.3 56.3.25
1,700	丸亀市	国庫補助(国・県・市)	〃	98条の2	藤好	56.9.2 56.12.22
1,500	香川県教育委員会	国庫補助(国・県)	〃	〃	齊藤	56.12.1 57.3.31
2,500	天霧城跡発掘調査団	県、一市二町業者	〃	57条の2	齊藤 好	56.4.20 56.8.26
60	観音寺市	業者	〃	〃	齊藤	56.8.7 56.10.17
100	香川県教育委員会	県	〃	57条の3	伊沢	56.8.1 56.8.15
30	国分寺町	国分寺町	〃	98条の2	広瀬	57.1.7 57.1.14
800	香川県教育委員会	県	測量	〃	藤大砂好古	57.3.11 57.3.29
100	〃	〃	石室実測	〃	〃	57.3.11 57.3.29
800	〃	〃	測量	〃	秋白	57.3.10 57.3.27
100	香川県教育委員会	坂出市	発掘調査	〃	森渡	57.3.8 57.3.29
南郷城跡発掘調査団	大川町 寒津町	町	〃	98条の2	調査伊沢	57.2.14 57.4.3
90	詫間町	詫間町	試掘	57条の3	伊沢	56.7.22 56.7.27
40	長尾町	長尾町	発掘調査	98条の2	長尾町	56.12.16 56.12.20
	調査団	調査団	〃	57条	調査団	56.7.29 56.8.2
10	坂出市	坂出市 保護協会	試掘	〃	坂出市	56.4.10 56.4.15
150			立会	57条の2	広瀬	56.6.23
150	綾南町		立会	57条の3	綾南町	56.7.1 56.7.10
300	坂出市	坂出市	発掘調査	57条の2	坂出市	56.5.12 56.5.31
10	長尾町	長尾町	試掘	98条の2	長尾町	56.6.27 56.7.6

# にし かた 遺 跡 C<sub>2</sub> 地区

(第1期, 第2期調査)

## ① 調査の経過

本年度の発掘調査は、昨年度おこなわれたC<sub>1</sub>地区に引き続き、西方の北頂から南に延びる尾根筋の残り 5,700 m<sup>2</sup>のうち 4,800 m<sup>2</sup>を対象地として 4月 20日に開始された。8月 31日をもって一応の終了をみたが、その後最終的に残っていた 900 m<sup>2</sup>の発掘調査が 11月 1日に再び開始された。翌年 1月 20日をもち今年度対象地区 5,700 m<sup>2</sup>の発掘調査を終了した。

この調査をもって西方遺跡C地区、さらには与島における発掘調査をすべて完了したものである。

## ② 調査の概要

本遺跡は、与島の西方の尾根筋のほぼ真中に位置しており、南には城山・金山を遠望することができる。標高約 56 m~62 mである。

調査区画は、C<sub>1</sub>地区の基準杭 (N - 13° - E) を延長して尾根筋に沿って 3 d ~ 45 d の基準杭を設定し、この杭より西側に c, b, a グリッド、東側に d, e, f グリッドを設けた。4 × 4 mを一単位として調査面積は 1,872 m<sup>2</sup>である。予備調査に基づき、出土量が希薄であるとおもわれる斜面部を除き、尾根筋の平坦部を中心で発掘調査をおこなった。

## ③ 土層と遺物の出土状況

調査地区の大半が樹木の繁茂するところで、土層はこの樹木の穴掘り・穴埋め作業を行い、遺物は混在しているため層位的把握は困難である。

土層はC<sub>1</sub>地区に準拠して 5 層に区分している。第 1 層は黒褐色腐植土層 (表土層) である。第 2 層は黄褐色砂質土層で、最も風化の進んだきめ細か



第1図 西方遺跡 C<sub>2</sub> 地区の位置



第2図 調査区域

い軽質の層である。第3層は茶褐色砂質土層で、やや粒の粗い風化土である。第4層は暗褐色砂質土層で、第3層よりも粒の粗い風化土で亜土層である。第5層は花崗岩風化土層で区画により硬度・色調は微妙に異なる。各層とも風化残留層である。

遺物は旧石器時代のものを主体として近・現代に至るものまである。土器片の混入は第3層までである。出土遺物は約1万点にのぼり、その出土状況にはいくつかの集中箇所がみられた。斜面部にも集中がみられ、その状況が単なる流れ込みであるとは理解し難いものがある。集中箇所は等間隔に点在しており、短期間ににおける形成ではないかとおもわれる。

#### (4) 主な遺物

旧石器時代のものを主として、ナイフ形石器、横長剣片石核・舟底形石器・細石刃・細石核・ポイント・スクレイバー、石鏃などである。

①ナイフ形石器 石器の大半を占めるもので、与島西方遺跡A地区の分類案に基づきA～G類に分けている。サヌカイト製のものがほとんどであるが、黒曜石製、頁岩製、流紋岩製のものが各一点づつ出土している。

②横長剣片石核 A～F類の6型式に分類されており、広義の横長剣片石核・交互剣離石核も含めている。

③舟底形石器 背面側からの整形、調整剣離によりI・II類に分類している。

④細石刃・細石核 A地区でも出土しているが、C<sub>2</sub>地区での出土状況は特定の区画に集中がみられ、細石刃・細石刃核とともに類例をみない一括資料としてそのあり方が注目される。細石刃核は作業面の形態によりA、B類、さらに自然面を有するか否かで1、2と分類している。細石刃核はハリ賀安山岩製のもので、細石刃にはハリ賀安山岩製のものとサヌカイト製のものがある。

⑤スクレイバー 刀部形状、調整等によりI～III類、さらにa、bに分類している。旧石器時代のものが主であるが、他に石鏃、石匙が出土しており、縄文時代あるいは弥生時代のものも含まれているとおもわれる。

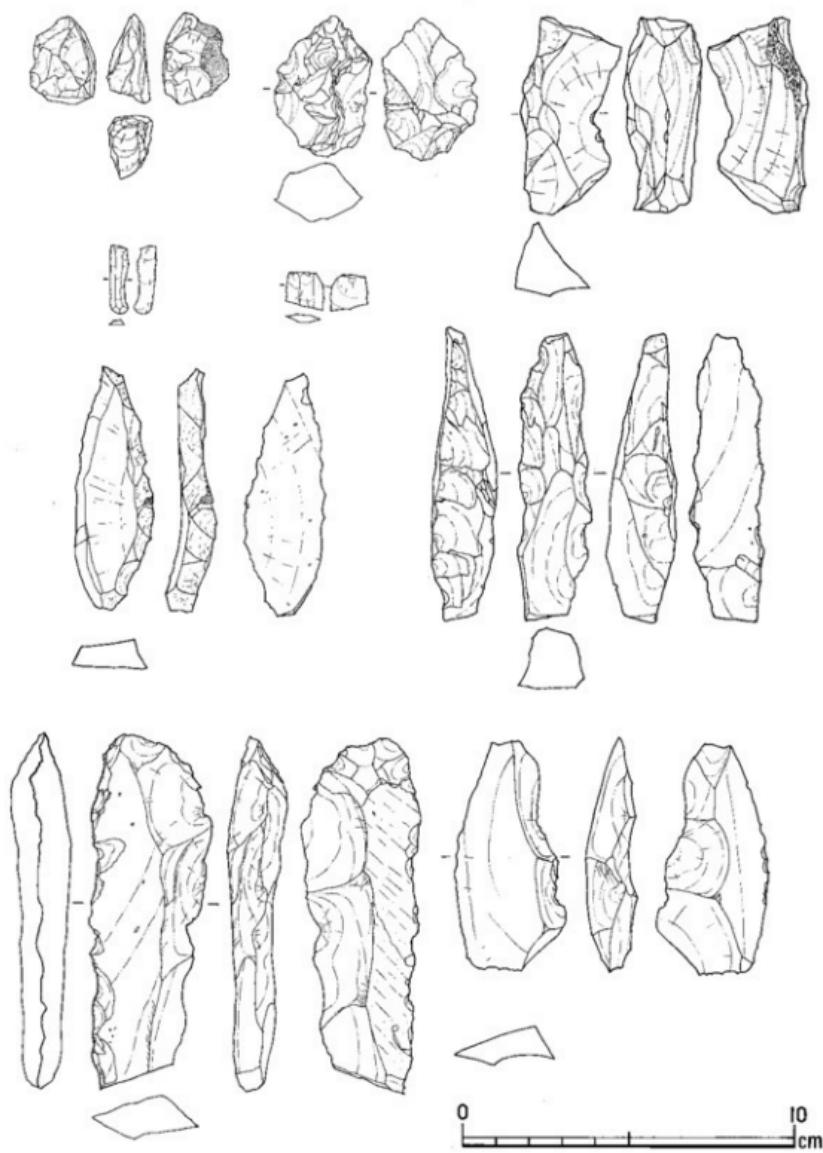
#### (5) おわりに

今回の調査をもち、与島における発掘調査もおわり、備讃瀬戸の主な旧石器時代の遺跡が明らかになったわけである。

C<sub>2</sub>地区における土層・遺物および出土状況等の把握は一つの段階に達したが、立地状態・条件など時代をさかのぼっての重要な問題が数多く残されており、A地区・B地区の共通理解によりC地区全体の遺跡のあり方を分析する必要があるとおもわれる。そのうえでの他の遺跡と西方遺跡との比較検討が望まれる。

なお、本遺跡の概要については「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(Ⅱ)」1982年を参照されたい。

(坂口淳子)



第3図 C<sub>2</sub>地区出土遺物

# おお うら はま 大浦浜 遺跡

## (1) 調査の経過

瀬戸大橋架橋工事にともない、昭和51年10月から昭和52年2月にかけて大浦浜で予備調査がおこなわれた。その結果をふまえて昭和55年5月より、3ヶ年計画で約20,000m<sup>2</sup>の発掘調査が行なわれており、本年度はその中間にあたる。本年度発掘対象面積は、浜中央部・南端調査区および工事用道路建設によるヤケヤマ東麓・北麓部を合わせて、約10,000m<sup>2</sup>であり、大浦浜自体の調査は本年をもってほぼ終了する予定である。

## (2) 遺跡の概要

備讃瀬戸に点在する塩飽の島々のうち、岡山にもっとも近い島が櫃石島である。香川県坂出市より船で1時間余、一方岡山県下津井港とは指呼の間にあり約10分で到着する。行政上は香川県に属するが、歴史的には岡山の影響を強く受けている。島には花崗岩がいたるところに顔を出し、「靈場“櫃岩さん”」として島民の信仰の対象となっている。

大浦浜は、櫃石島のはば中央部の東側に広がる砂丘上に営まれた縄文～中世に至る複合遺跡である。遺跡南端から中央部にかけては主として製塙及び漁撈に関する生産の場である。またヤケヤマ東麓では縄文～古代までの生活の場を思わせる遺構・遺物を検出している。浜には小規模な畑作及び果樹栽培が営まれていたが、現在は雑草の繁茂に任せている。



第1図 大浦浜位置図



第2図 大浦浜遠景



第3図 作業風景

### (3) 土層について

調査区全域に  $5m$  方眼で区画設定を行ない、通常  $10 \times 10 m$  を一単位として全面発掘を実施し、その必要のない区画に關しては幅  $6 m$  のトレンチによる調査を実施した。

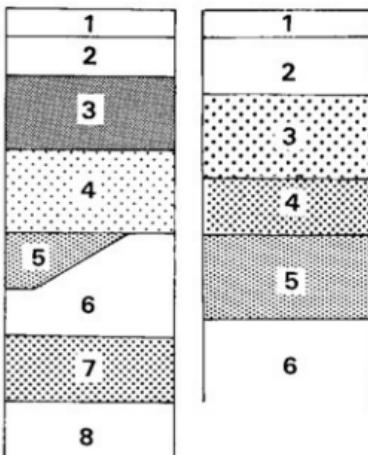
土層は海水及び湧水のため区画ごとに複雑な堆積状況を示している。ここでは、浜中央部及びヤケヤマ東麓の土層序を示しておきたい。浜中央部では縄文時代の堆積の後に、浜堤が南北に形成され、丁度緩やかな馬の背の様になった。この層は、ほとんどといつていいほど遺物を含まず、湧水の著しい層である。その後、浜の西の傾斜面で古式土師器・須恵器が堆積し、その上に古墳時代後期の製塙土器の包含層が形成されたと思われるが、この層は中世に大規模な攪乱を受けている。また浜の東側傾斜面については、大正年間の砂とりにより、浜堤形成以降の層序が不明になっている。ヤケヤマ東麓の層は、大別して6層に分けられる。縄文・古式土師器・古代末の順に山麓から海にむかって傾斜し堆積している。

### (4) 遺構について

遺構は、浜南端区からヤケヤマ東麓に至る浜全域にわたって広範囲に検出された。このうち主なものを、調査区ごとに述べよう。

南端区では古代末～鎌倉時代初頭と思われる土坑群及び湧水溜めと思われる集石遺構。中央部以南地区では、古墳時代後期の製塙炉と製塙土器包含層、奈良時代に形成された製塙土器包含層・作業面・及び付属施設、平安末～鎌倉時代にかけての製塙施設の粘土土坑群。中央部では性格不明の粘土遺構。ヤケヤマ東麓では、粘土土坑・焼土面・建物跡3棟などである。その他、多數のピット・土坑群が検出されたが、多くは時期・性格共に不明である。

このうち、土器製塙の盛行した古墳時代後期の製塙炉の検出は注目される。製塙炉は、古墳時代後期の製塙土器包含層の東端に位置し、長軸  $3.2 m$  ・ 短軸  $1.5 m$  ・ 深さ  $30 cm$  の土坑の両端に石を置いた構造である。炉の周囲は堤状に盛り上がっている。炉内の石は焼けており、床面はほぼ平炉でフラットな面を形成している。この炉がどの期間活動したかという点や焼き塙炉



1. 表土
2. "
3. 古墳時代後期の包含層
4. 須恵器の包含層
5. 古式土師器の包含層
6. 砂丘の形成層
7. 縄文後期の包含層
8. 地山

1. 表土
2. "
3. 古代末の包含層
4. 古式土師器の包含層
5. 縄文後期の包含層
6. 地山

浜中央部

ヤケヤマ東麓

第4図 土層模式図

の存在など今後の課題は多い。また昨年度より検出が続けられた古代末～鎌倉時代の粘土遺構は、火を受けた粘土土坑も存在することが判明し、土器製塩衰退後の製塩施設としての可能性が強まっている。

#### (5) 遺物について

遺物は、多量にまた時代幅も広く出土した。縄文中・後期の土器・石器、弥生前期の土器・石器、弥生後期の製塩土器、古墳時代の須恵器・土鍤・螭壺・ミニチュア土器・船形土製品・滑石製模造品、奈良～平安時代の須恵器・土師器・製塩土器・奈良二彩・小札・皇朝十二銭、鎌倉時代の土師質土器・瓦器・輸入陶磁器などその他、貝類・魚・獸骨など出土した。このうち、注目されるのは、ヤケヤマ東麓で多量に出土した縄文土器である。出土状況は良好で、遺構にともなう土器もあり、縄文後期の生活の場所と関連づけて考えられる。また、所謂古式土師器も昨年同様、群として、また包含層として多量に出土しており、これも浜北部の生活面と密接に結びついていたと思われる。

以上の出土遺物のうち、やはり量的には製塩土器がもっとも多く、とりわけ古墳時代後期の製塩土器は厚いところで約50cmの層を成している。また奈良時代の製塩土器も多量に出土したが、南端調査区では平安末～鎌倉時代初頭の土坑より多量に、奈良時代と同型と思われる製塩土器が出土した。出土量を他地区と比較してみると圧倒的に少ない。それゆえ土器製塩により大量に製塩活動を行なったとは言えないが、自給自足かあるいは祭祀としてこの土器を使用したと思われる。

#### (6) おわりに

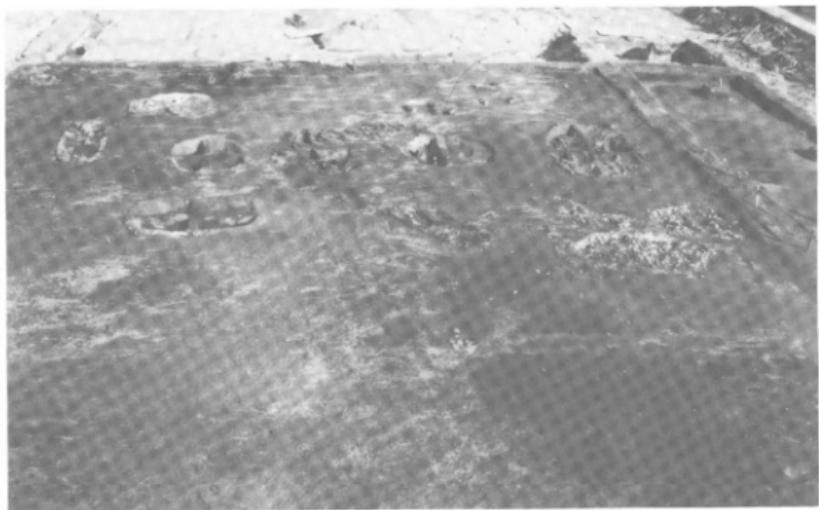
今回の調査も前年同様、多大な成果があった。大浦浜における製塩活動は、弥生後期から始まっていることが確認され、製塩土器編年も可能となった。一方、古代末～鎌倉時代にかけての製塩活動の施設と思われる粘土遺構の解明も進んでいる。これらにより、大浦浜の製塩の始まりから終末までの、歴史的流れが早晚判明するだろう。祭祀については一連の出土遺物により、瀬戸内の交通路の要所として大浦浜の果たした役割がより一層明確になってきている。また、砂丘の形成期、大浦浜の地形復原も縄文土器の多量出土などにより次第に明らかになっていている。さらにはヤケヤマ東麓における遺構群は、生活の場を感じさせてくれる。

以上のように、成果は枚挙の暇もない。詳しく述べては『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(Ⅳ)』が刊行されているので、参照されたい。

(安田和文)



第5図 製塩炉（西より）



第6図 粘土遺構群（南より）



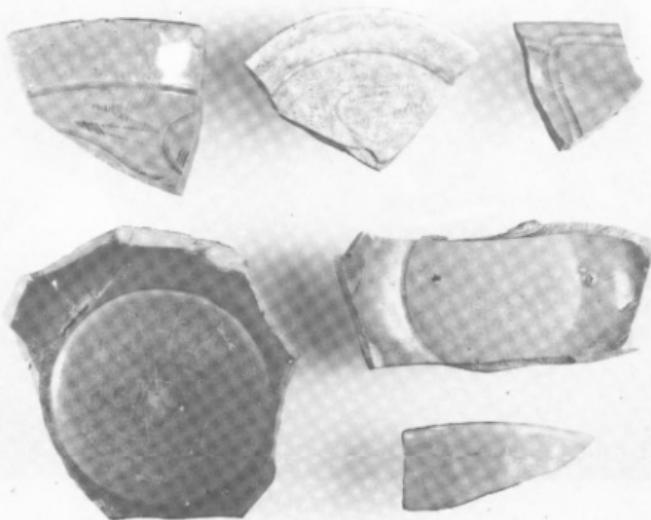
第7図 製塩土器包含層



第8図 製塩土器包含層剥ぎ取り



第9図 繩文土器



第10図 輸入磁器

# にしむら 西村遺跡(Ⅲ)

## (1) 調査の経過

昭和54年度より3次にわたった西村遺跡発掘調査も今年度(第3次調査)をもって終了した。そもそも西村遺跡発掘調査は、一般国道32号綾南バイパス建設工事(建設省)に伴う事前調査として昭和54年7月より実施されてきたものであり、今年度の発掘面積6,395.5m<sup>2</sup>を含め3ヶ年で23,077.5m<sup>2</sup>を発掘したことになる。

今年度の発掘調査は、昭和56年4月3日(金)より昭和57年3月25日(木)までおこなわれた。調査対象地域は前年度発掘した西村3号窯と川北地区とに挟まれた東西約220m、南北約30mの地域(山原地区)である。

## (2) 遺跡の概要

西村遺跡のある綾南町は香川県のほぼ中央部に位置し、都市化が進む現代においてその波にもまれながらもまだ農村風景を漂わせている。田んぼの中を2両編成の電車がゆっくりと走っている姿を見るとその感を一段と強くする。

このような農村風景を残す綾南町の陶は、奈良時代から平安時代の須恵器窯・瓦窯跡として有名である。陶を含めこのあたり一帯で現在100基以上の窯跡が確認されている。おそらくこの地域特有の良質粘土の存在によるものであろう。

今年度の調査地区は、農道をはさんでN-S15～N-S25までの計22グリッドであった(区画は基本的には20m×南北幅で、西より15～25)。

N-S21・22は客土による攪乱を受け、遺構はもちろん遺物の出土状況もきわめて悪かった。

N-S23～25では(N-S23は趣を異にするが)、近世に客土による水田化がなされているため、遺構、出土遺物は近世以後のものであった。



第1図 西村遺跡と周辺の窯跡 (1:50,000)

1. 西村遺跡54年度(第1次)調査区
2. " 55年度(第2次) "
3. " 56年度(第3次) "
4. 北条池須恵器窯跡
5. 小坂池窯跡
6. 丸山西窯跡
7. ますえ畑窯跡
8. 十瓶山北麓窯跡
9. 辻陶窯跡

N・S15～20は今年度の調査で最も時間が費された地区で、西村遺跡本来の古代後半～中世前半に関する遺構・遺物の検出・出土がみられた。

#### (3) 土層序と遺物出土状況

基本的な土層序と遺物出土状況について概略することにする。

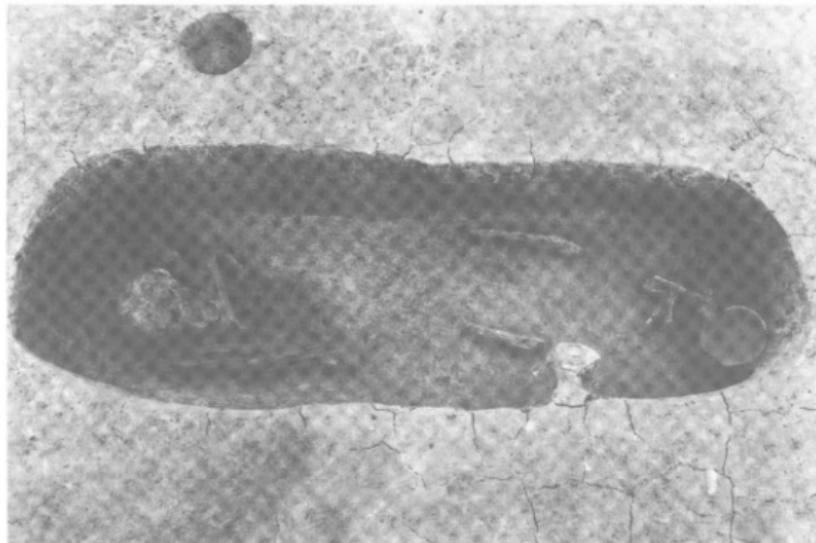
上から、第①層—暗灰色粘質土層（耕作土）、第②層—茶褐色粘質土層（床土）、第③層—灰茶褐色粘質土層、第④層—茶灰褐色粘質土層、第⑤層—淡明茶褐色粘質土層、第⑥層—黄褐色粘質土層（地山）、第⑦層—暗紫色粘土層（地山）となっている。S19EとN・S20では、第⑤層と第⑥層の間に遺物包含層が堆積していた。

第①層～第④層までは重機で除去したのであるが、出土遺物は現代の陶磁器を含め近世以後のものであった。第⑤層（特に下部）およびS19E・N・S20の遺物包含層に至って大量の土師器、瓦質土器等が出土した。遺構はいずれも地山面に刻まれていた。

#### (4) 主な遺構について

今回遺構として、ピット群、掘立柱建物遺構、柵列、土坑群、土壙墓、焼土坑、溝などが検出された。

掘立柱建物遺構は計5棟が確認されており、1間×2間が4棟、1間×5間が1棟である。このうち、1間×5間の1棟を除いて、残りの4棟には周溝と思われる溝がまわりを囲って



第2図 土 壙 墓

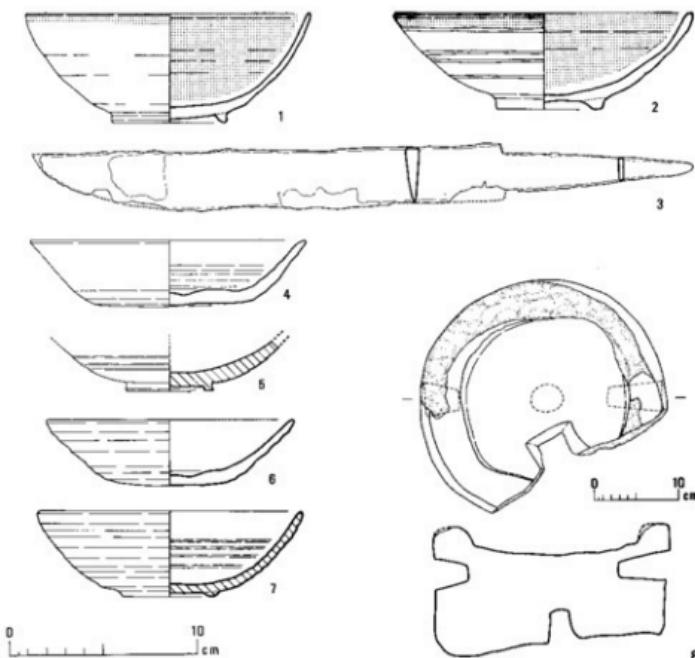
る（卷頭写真）。

土坑群としては、S19E・N・S20において粘土の抜き取り坑跡と思われる直径約60cm～200cm、深さ約30cm～100cmぐらいの土坑が多数検出された（第4図）。出土遺物はそう多くないが、土師器、黒色土器などが出土している（第3図1）。また、N・S15～S19Wにおいて、黄灰色粘質土を埋土とする性格不明の土坑が群をなして検出された。直径はまちまちであるが、深さは約10cm～20cmぐらいで、前述の粘土の抜き取り坑跡と比べて非常に浅い。

次に土壙墓であるが、N17で南北約173cm、東西約61cm、深さ約25cmの土壙墓を検出した（第2図）。明確な形で人骨（頭蓋骨）が認められ、刀を抱いた格好で顔は西に頭全体は北向きに寝かされていた。瓦質土器椀、土師器皿各1点が伴出した（第3図3・4・5）。また、S17では下部に石が敷かれ面がつくられている土坑が、S16では刀子と漆の細片が出土した土坑がそれぞれ検出された。いずれも人骨が明確な形で出土していないので、速断は許されないが、土壙墓としての可能性は十分に考えられる。

#### ⑤ 主たる遺物

N・S15～20での遺物の中心は平安時代後半～鎌倉時代前半のものである。



第3図 出土遺物実測図

土師器、瓦質土器は出土点数も多く、器種としても小皿・皿・椀・鉢・甕などが出土しており、黒色土器に関しても少量ではあるが椀がみうけられる(第3図2)。須恵質土器もそう多くはないが、椀・壺・甕・四耳壺などが出土している。

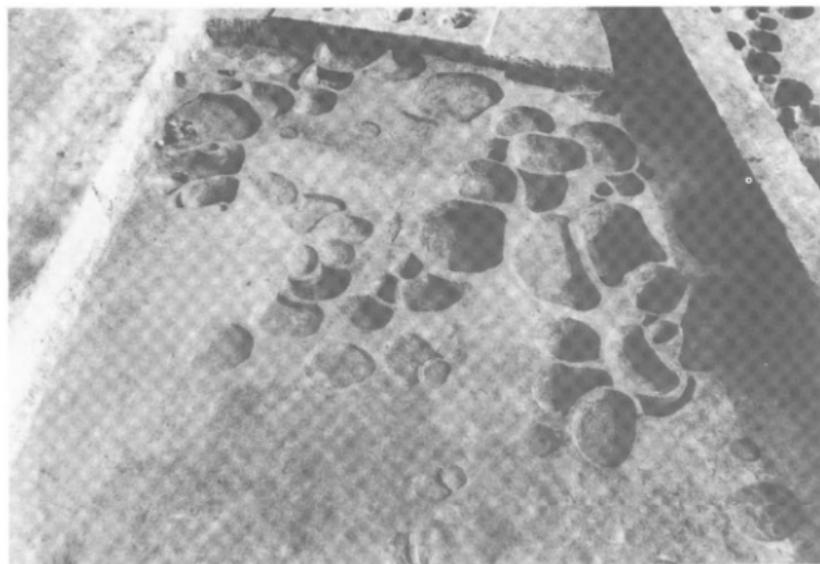
さらに、輸入青・白磁、陶磁器も掘り出され、瓦(平瓦・軒丸瓦・丸瓦)も出土している。また、N-S23~25では(特にN-S24・25)近世のものと思われる石臼(第3図8)・砥石・陶器・磁器・円盤状土製品などが出土している。なお、S23の土坑からは瓦質土器椀・土師皿(第3図6・7)・土師器小皿などが数多く堀り出されている。

旧石器時代～弥生時代の遺物(石器)としては、翼状剝片・有舌尖頭器・スクレイパー・石・磨製石斧などであった。

#### (6) おわりに

今年度の調査における出土遺物量は昨年度のそれを大幅に上まわった。また、粘土の抜き取り坑跡やまわりを溝で囲まれている堀立柱建物遺構などを検出した。これら遺構・遺物の発掘をふまえ、成果として最後に3点ほど記しておきたい。

1つは、今年度の調査区である山原地区でも住居跡が見つかったこと。2つは、西村遺跡の中で粘土の抜き取り坑跡が確認されたこと。3つは、大量の土器が出土し、讀経の古代～中世の土器編年研究に少なからず資料を提供し得たことであろうと思われる。(林 正弘)



第4図 粘土の抜き取り坑跡

# なかのいけ遺跡

## (1) 調査の経過

今年度の調査対象地は前回昭和51年度調査地点のすぐ北に位置する。現状は水田である。調査は昭和56年9月3日から同年12月23日にかけて実施した。調査対象面積1,675 m<sup>2</sup>、実質発掘面積は740 m<sup>2</sup>である。

## (2) 遺跡の概要

丸亀平野のはば中央部を南から北へ流れる金倉川の下流域東岸に遺跡は位置する。標高は10~11mを計る。弥生時代前期の集落跡と考えられる。

## (3) 遺構

調査区の北部から東部にかけて、幅5m前後、深さ1m程の溝が3本平行して走る状況で検出された。3本の溝は緩やかな弧を描き、弧の中心を南北方向に有する。溝はいずれもその堆積土中に全くと言って良いほど砂を含まず、非常におだやかな状況で埋没していったことが伺われる。中央の溝の断面は上部が大きく開いた「U」字形を呈するが、他の溝は溝内部に段を有する。溝は同時期に存在したものではなく、

SD8101(中央の溝)→SD8102(東部の溝)→SD8105(西部の溝)

の先後関係を有している。ただSD8102とSD8105はそれほど時期差があるとは遺物の状況からは考えられず一部オーバーラップする可能性がある。中央の溝にはD-8区を中心として、その最上層に配石遺構が認められ、溝を廃棄する際に祭祇を行ったと考えられる。西部の溝底部に地山を削り残して舟の竜骨状の施設を有し、対応するように集落の中心から外側面に階段状の施設、内側の下場のラインに沿って柵列のものと考えられる小ピット群が30cm程の間隔で溝の方向に並ぶ。

これらの溝は環濠になると考えられ、昭和51年度調査により検出された同規模の溝との間に集落が営まれたと考えられる。濠に囲まれた集落内部に相当する部分は、地下げのため遺構の残存状況は良くはない。炭化物や土器片を含むピットやそれを囲むように配された柱穴と考えられるものが検出された。おそらく住居跡の床面下部まで地下げが及んでいる状況と考えられる。

## (4) 遺物

検出された3本の溝から多量の土器片、石器類、獸骨、炭化米が出土した。形態的には弥生



第1図 中の池遺跡の位置 (1:25,000)

前期の古い段階から新しい段階までの遺物が各々の溝には包含されている。しかしその比率において、中央の溝と西部の溝には大きな差が認められる。甕に関しては、中央の溝には如意状口縁のものが約75%前後含まれるのにに対して、西部の溝では25%前後しか含まれず、口縁端部の断面形が三角形状を呈するものや櫛を施文具として用いた甕が存在するなど明確な差がある。一方壺形土器に関しては中央の溝の方が削り出し突帯を有するものが多くて西部の溝では壺頸部の長頸化に伴い、頸部の外反化、文様帶の拡大が認められる。一部中央の溝の上層においても阿片系の口縁内部に貼付突帯を有する壺が、西部の溝では大幅に増加し、文様自体も複雑化するなど差異が認められる。

石器類としては、石庖丁、石斧、石鎌、石錐、スクレイパー、石鍬もしくは石斧未成品、凹み石及び石器製作時に使用されたと考えられる叩き石や砥石が出土している。石庖丁には片岩系の石材を用いた磨製のものと、サヌカイト質の打製のものがある。また石斧には蛤刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧があり、いずれも結晶片岩系の石材を用いているのに対して、石鍬もしくは石斧の未製品と考えられる石器は硬質の砂岩系の石材を用いているものもある。

#### (5) まとめ

今年度の調査で検出した溝と昭和51年度の調査で明らかになった溝とは一部を除いて、つながるものかどうか不明確な点が多い。ただ今年度の西部の溝と51年度の東部の調査区で検出された溝が同一のものであることはほぼ確実である。

なお、詳細は丸亀市教育委員会刊行の「中の池遺跡発掘調査概報」を参照されたい。

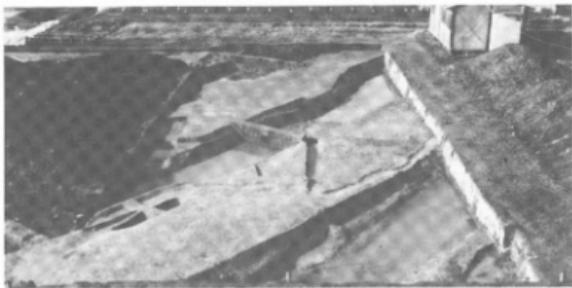
（藤好史郎）



第2図 中の池遺構図

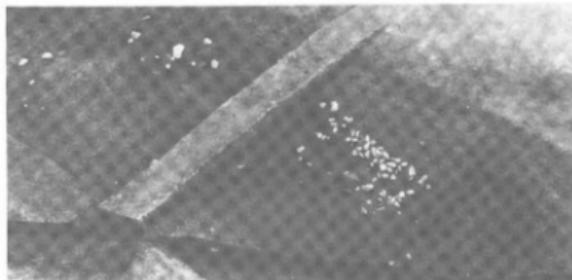
第3図

調査区北部（東から）



第4図

SD 8101 壺形土器・配  
石遺構検出状況（北から）



第5図

SD 8105 （北から）



第6図

SD 8105 （北西から）



# 讃岐国府跡

## (1) 調査の経過

昭和56年度の讃岐国府跡の発掘調査は、昭和56年12月1日から昭和57年3月31日まで、坂出市府中町本村5193-1及び5192-2番地の水田で実施した。昨年までの調査により倉庫跡や基壇と溝の検出がなされ、南半においては次第に明らかにされつつある国府跡である。本年はすでに五年目を迎えており、次第に加速されつつある開発の波はとどまるところを知らない。

早く国府域を確認し、保存措置を講じる必要性に迫られている。そこで、本年は国府域の北限を探ることを目的として、倉庫跡の検出された水田の北約200mに調査区を設定した。調査区の基準軸は昨年同様、開法寺の塔の中心軸と同じN-23°20'-Wに設定した。

## (2) 遺跡の概要

調査区を設定した水田は、城山から東に延びる谷筋の1つ北谷に属する。緩やかな傾斜がわずかに水田の段差を感じられる谷筋の南側にあって目立った地形の変化はみられない。周囲はほとんど水田だが、当該地に接して北側には、かなりしっかりした用水路と幅2m程の道がある。この道の北側には「大町」の呼称が、また東約100mには「御田」の地名が残る。水田面の標高は約14.5mを測る。耕作土下50cmは近世の客土で、さらに20~30cm下がると平安末から鎌倉時代前半期の包含層にある。調査区南寄りでは包含層は浅く、地面下約70cmで明黄色粘質土の地山となる。地山は北東に向かって緩やかに傾斜しており、平安時代前期から中期の遺物を多く含む黒褐色粘質土層の厚さも増している。

## (3) 遺物の出土状況

全体の傾向として遺物の出土量は少ない。

平安末から鎌倉初期の包含層以下になってやや遺物の出土量も多くなる。多くの遺物が磨滅しており、土壤の攪乱が著しかったことを物語っている。黒褐色粘質土層からは獸骨片・種子など有機質の遺物も出土した。



第1図 讃岐国府跡調査区位置図(1:25,000)

#### (4) 遺構について

調査区南半では平安時代末から鎌倉時代前半期と思われる浅い溝・ピット群が検出されたが、性格は明らかにされなかった。また同時期の溝が北端でも検出された。この溝SD08は幅(推定)2m・深さ0.4mを測る。方向はほぼ現代の溝に平行する。この溝の埋土は数次にわたって使用されたことがわかる。またこの溝の南側約2mに平行して走る細い溝SD07が検出された。幅0.4m・深さ0.3mを測る。断面明瞭なU字状を呈するこの溝は淡青灰色砂質土層が埋土で、極めて短期間で埋没した状況である。溝に伴う遺構は検出されなかった。

この溝の掘り込まれた黒褐色粘質土層を埋土とする溝が調査区南半で2本検出された。幅、深さともに小規模で、耕作に伴う用水路と思われる程度である。

#### (5) 主たる遺物

SD08からほぼ完形に近い土師質椀・皿が出土したほかはすべて破片の状態で出土した。調査区北半に堆積した黒褐色粘質土層からは、平安時代前半から中頃の須恵器皿・壺が出土した。そのうちの皿1点には墨書きが見られる。磨滅しており判読が困難だが、「盛」あるいは「盈」に読める。胎土・調整とともに極めて良質で、特異性を示している。須恵器の外にも、白磁皿・椀、青磁皿・椀、青白器、綠釉土器椀・皿などが出土している。綠釉土器は、胎土の焼成が須恵質のものが多く、平安時代後年に比定される土層からの出土が多い。第5図は6層～9層出土の須恵器である。第6図は6層～8層出土の土師質土器・瓦質土器・綠釉土器・磁器である。



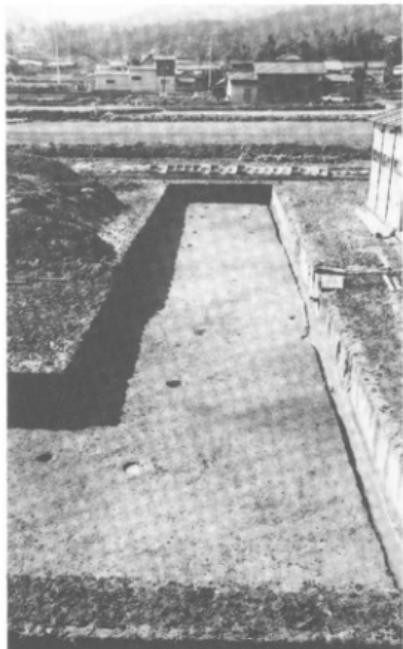
第2図 調査地区配置図

#### ⑥まとめ

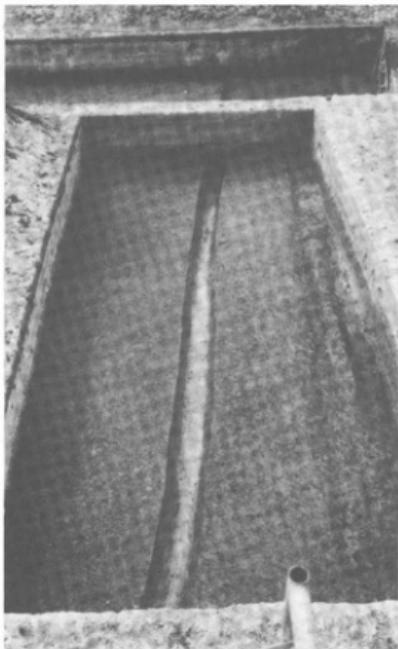
国府域の北限に伴う遺構の検出を目的として発掘調査をおこなった今年度の調査だが、直接国府に関する遺構は検出されなかった。

しかし、調査区北端で検出された平安末から鎌倉時代前半に比定される大溝は、ほぼ現代に残る条里遺構に合致しており、今後の条里研究に一石を投げることになった。また、地山面のゆるやかな傾斜と包含層の存在は、国府域の近辺における可能性を示唆しており、今後さらに調査が望まれる。

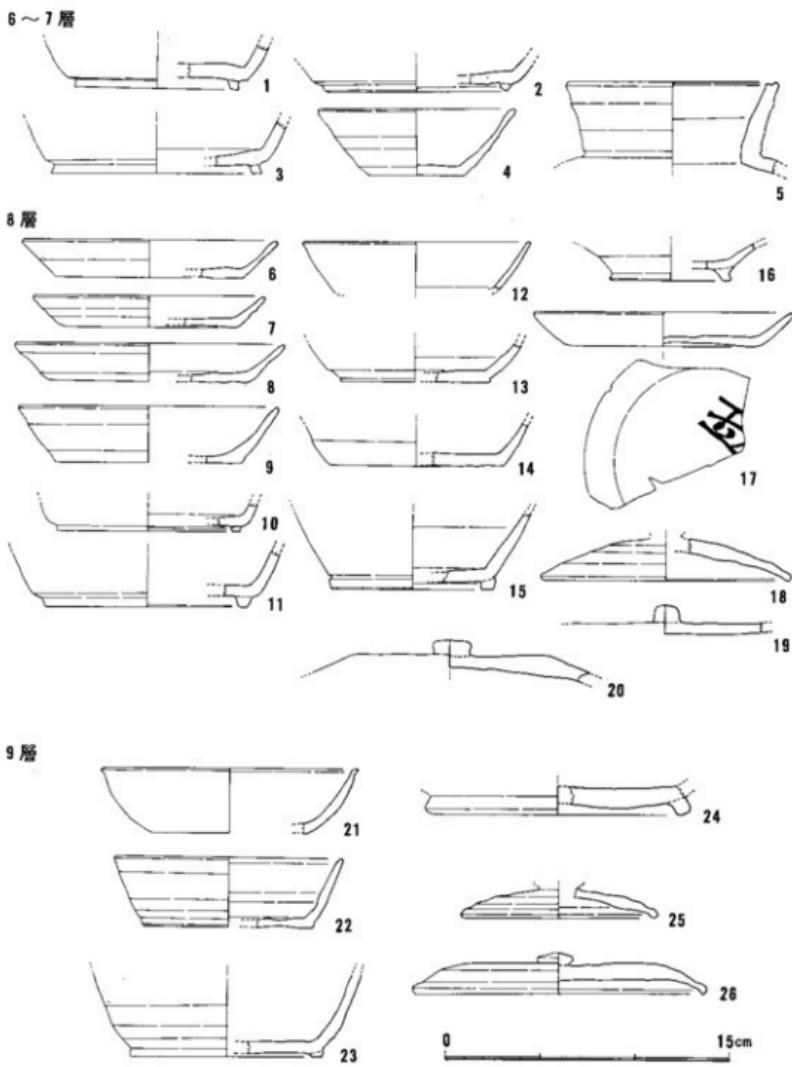
（斎藤賢一）



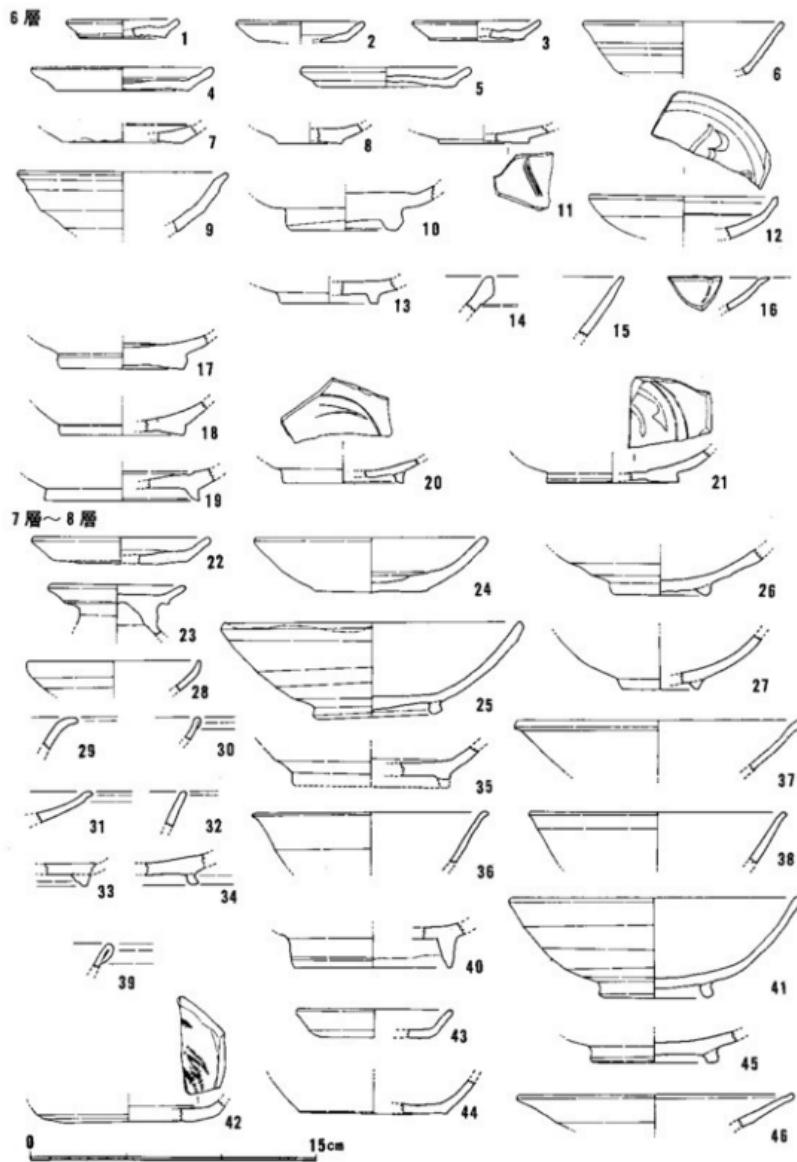
第3図 E1～E5ピット群（東より）



第4図 A6・A7, SD07, SD08  
(東より)



第5図 国府跡出土須恵器



第6図 国府跡出土土師器（1～6・22～25・27・43） 線釉土器（17～21・31～36・45・46）  
瓦質土器（26・41・44） 磁器（7～16・28～30・37～40・42）

# いし だ こう こう こう てい ない 石田高校校庭内遺跡

## ① 調査にいたる経過

香川県立石田高等学校で農業実験室及び農業管理実習室建て替え工事の事前調査として小規模の発掘調査を実施した。

当所は、弥生遺跡として周知されているところであり、昭和56年6月2日、3日の試掘にもとづいて、発掘調査を実施した。

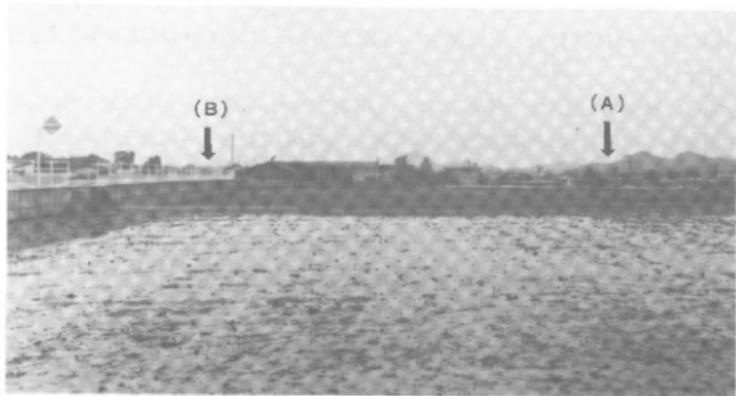
現場調査は8月1日に開始した。対象面積160m<sup>2</sup>のうち80m<sup>2</sup>を発掘し、8月15日に終了した。

## ② 位置と環境

南に讃岐山脈から派生した矢筈山塊、北に雨庵山塊、石槌山塊が共に東西に走っている。讃岐山脈から流れ出た地蔵川や梅檜川によって形成された沖積地に石田高校校庭内遺跡は立地する。地蔵川は、沖積地を蛇行し鴨部川へ合流し、梅檜川は、雨庵山を囲むように大きく蛇行し津田川へと流れ込んでいる。



第1図 遺跡の位置 (1:25,000)



第2図 石田高校校庭内遺跡 (A)

森広遺跡 (B)

周辺には、巴型銅器が8点出土した森広遺跡をはじめ、弥生後期末頃の集落跡や銅鐸片が発掘された加藤遺跡、雨滝山裾野に広がる大井遺跡など、多くの弥生遺跡が点在している。

### (3) 遺跡の概要

今回の発掘調査は、実習室の建て替え工事に伴うもので、非常に小規模な発掘であったが弥生式土器の出土量は非常に多い。

本遺跡は、標高32~34mの沖積台地上にあり、周辺の土地より1~2m高くなっている。当遺跡では昭和53年の、旧実習農園の発掘によって住居跡が発見されている。また、当所より南30mでも12~13年前の発掘調査により、住居跡が確認されており、住居跡に伴う、溝や大型の甕なども出土している。

今回の調査地は、180m<sup>2</sup>が対象であったが西側半分の90m<sup>2</sup>に、2m×2mのグリッドを3ヶ所設定し、試掘してみた結果、土の入れ替えをしていった。戦前には、ゴボウ畑や桑畑として開墾していたという。

従って、発掘調査はもっぱら東半分を対象として実施することになった。実習管理倉庫を取り壊した跡なので、ステンレスが各所に遺存しており、所によっては、第3層にまで掘り込んで基礎をしていた。おむね表土層から2層までは相当の攪乱を受けている。2層は褐色土層で弥生式土器片や須恵器片などの遺物を含んでいた。3層は黒褐色の砂質土で弥生式土器の包含層である。しかし中に須恵器を含んでいる個所もあった。4層は遺構面で、黄褐色をした砂である。

遺構では2条の溝状遺構が検出された。SD01は、幅平均50cm・深さ20cmの略南西-北東に走る溝状の遺構である。溝状の凹みは黄褐色の砂を掘り込んでおり、溝内の堆積土は黒褐色砂質土である。溝の形は、やや不整形で、グリッド中央部で大きくふくらんでいる。溝の底部は葉げん的な丸味をおびている。出土遺物は、溝の上部から、こぶし大の岩石と弥生式土器が集中的に出土した。

SD02は、幅50cm・深さは、南端で20cm、北東端で35cm、略南西-北東に走っている溝状の遺構であるが、グリッドの北東端で深く落ち込み、終結している。一応溝状の遺構と考えられるが、土坑とも考えられる。溝の肩のレベルや堆積土などはSD01と同様であるが、溝内の土器は圧倒的にSD01が多い。

2条の溝状遺構が検出されたが、2条とも直線的に走る溝でなく、かなりわん曲し、底の深さも一定でなく凸凹状を呈している。砂質のためか、全体的形状は不安定なものとなっている。遺物の総量は、発掘が少範囲であったにもかかわらず多い。

弥生式土器の甕・壺・高杯などが主流をしめる。甕では口縁がゆるいくの字を呈する小型甕が多い。また、土師器への移行期にあたる小型丸底壺も出土した。

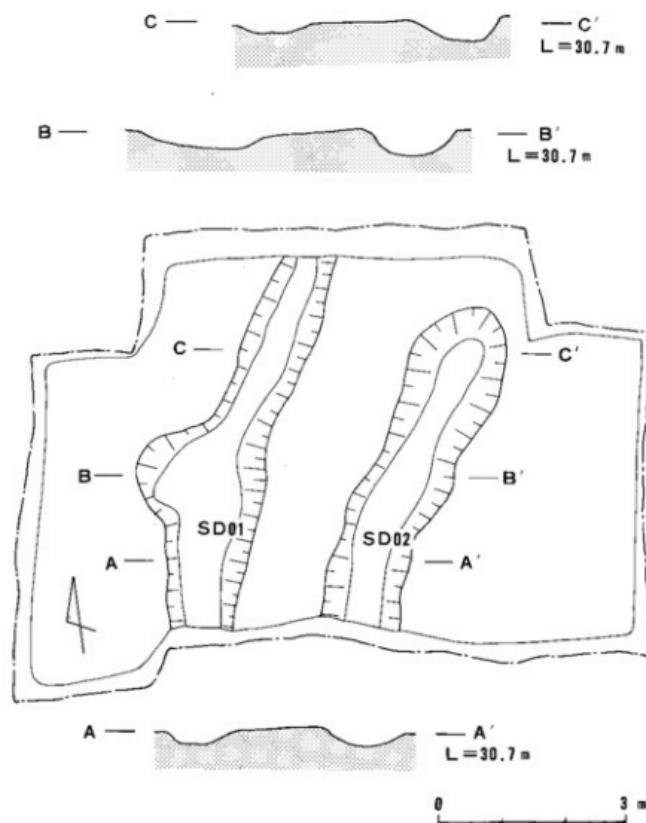
### (4) おわりに

弥生時代の住居は、紫雲出山などの高地や丘陵地が選定されていたが、農業の進歩とともに

低地へと進出していった。当遺跡は、標高32~34mの沖積地であり、農業生産を生活基盤とするのに絶好の地にある。周辺には森広遺跡や加藤遺跡など同時期の遺跡が知られており、弥生時代には、かなりの広範囲にわたって集落を形成していたことがわかる。

当地での発掘面積が極めて少範囲であったが、検出された2条の溝状遺構が、住居跡とどんな関連があるのか、また、現在未整理であるが、弥生時代後期末に想定される出土土器がどんな形態に分類できるのか興味深い。

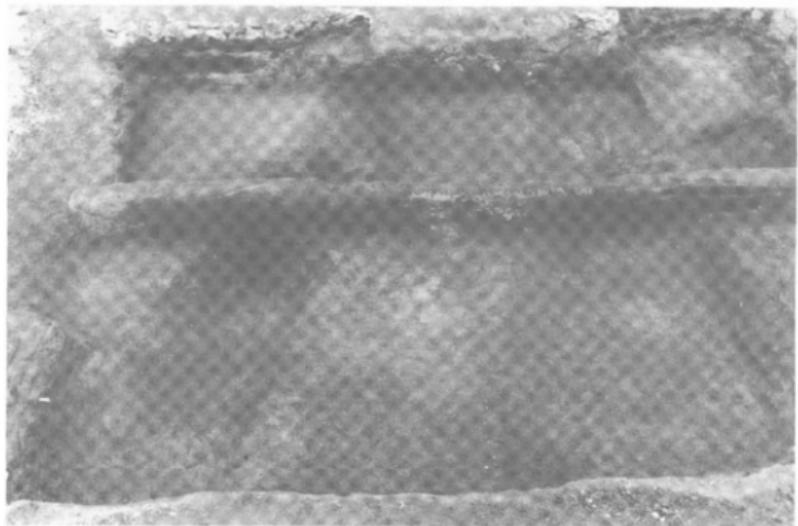
(伊沢肇一)



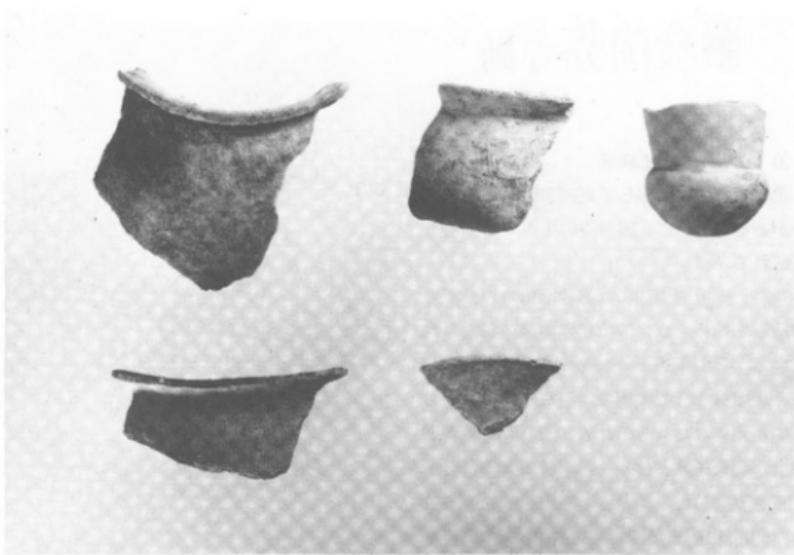
第3図 溝状遺構図



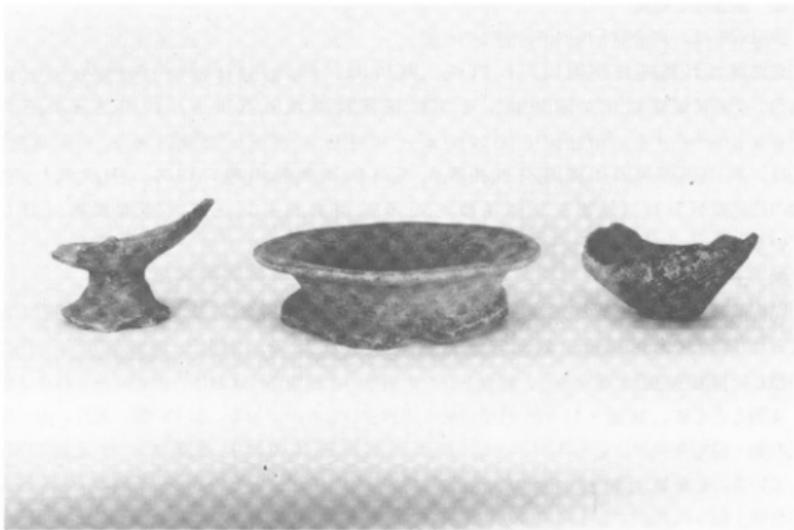
第4図 発掘風景



第5図 满状遺構



第6図 出土土器(Ⅰ)



第7図 出土土器(Ⅱ)

# 讃岐国分寺跡

## ① 調査にいたる経過

讃岐国分寺に隣接して真言宗御室派の宝林寺がある。本来は、国分寺の末寺で円林坊と呼ばれていた。

現在、国分寺周辺には方約 230 m の地割りの痕跡が認められ、国の特別史跡に指定されている。その東辺より約 70 m 西の旧国分寺境内（現宝林寺）で増築にともなう現状変更の申請が出された。そのため、国分寺町教育委員会が調査主体となり、香川県教育委員会が調査を実施した。期間は、昭和 57 年 1 月 6 日より同月 14 日までであり、約 22 m<sup>2</sup> の調査を行った。

## ② 調査地の概要

国分寺町は、高松市と坂出市の間にあり調査地の南には旧国道 11 号線が走行している。周辺には、その北に旧石器の分布が認められる国分台、北西に朝鮮式山城の城山山城、その麓に國府跡推定地などがあり、また東 2 km には国分尼寺などが所在する。讃岐国の古代における一つの中心地を形成した地域である。今回の調査地は、香川県綾歌郡国分寺町国分 2080 番地、宝林寺（童嘆嘆純住職）である。旧 11 号線と調査地の比高差が 3 m 以上もあることでもわかるように、北に向って上っていく緩傾斜地に位置している。

## ③ 土層序（第 2 図）

発掘前の調査トレンチの海拔は、34.0 m であった。表土の 1 層は、厚さ 10 ~ 20 cm の固くしまった花崗土であり、最近、整地のために敷かれたものである。2 層は、整地時の削平で凹凸が激しい黒褐色粘質土層であり、調査トレンチ南壁の土層観察によれば、下層にみられる 3 層・4 層とともに、10 層・11 層の堆積以後に認められるものである。掌大の礫、瓦片、近・現代の陶・磁器を混在して包含している。5 層は比較的安定しており、調査トレンチ全面に堆積している。しかし、遺物は、ほとんど包含していない。6 層は、そのさらに下層の 7 層（暗灰黄色粘土層）に類似する土層であり、少量の瓦などを含んでいる。7 層は、固くしまった粘土層で地山である。



第 1 図 讃岐国分寺の位置 (1:50,000)

以上の堆積状況よりみて、現地表下90cmで地山を検出したが、それにいたる各層で明確な遺構面は認め難いと思われる。ただし、5層および、11層をベースとする

落ち込み状の地形が

想定される。10・9層の堆積が1つの落ち込み状の地形を、さらにそれをベースとした4・3・2の極めて最近の落ち込みが考えられる。

なお、遺構は確認できなかったが、4層の下層に相当する土層より埋甕を検出したが近世以後のものである。

#### (4) 遺物(第3図)

2・3・4層と、6層を中心として、遺物を出土している。大部分が瓦破片であり、平瓦片が多い。そのうち、一点の拓影を示した。

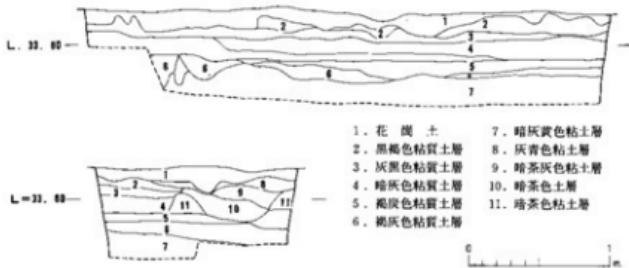
均正唐草文軒平瓦の破片である。焼成は、良好で青灰色を呈している。周縁は、

極めて細く、外区上帯には珠文を、下帯には鋸歯文を施している。ほぼ中心の破片であり、内区には左右に広がる唐草文が認められる。6層の褐灰色粘質土層より出土した。東大寺系の瓦である。

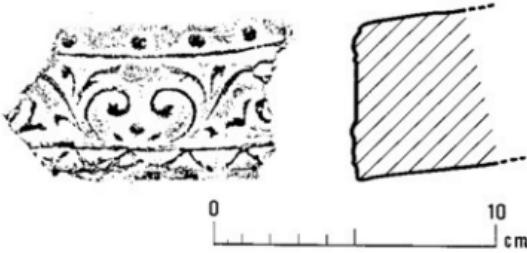
#### (5) まとめ

現在まで、旧国分寺境内に数回の調査が行われている。今回の調査は、現在の国分寺に近接し、その旧境内であったんだろうと思われるが、調査トレンチの範囲などの制約もあったために、遺構としての成果はあげられなかった。5層をベースとする落ち込みと、11・10層をベースとする2度の落ち込みを確認したが、包含されている遺物より考えれば、いずれも近世以後のものと考えるべきものであろう。現在の国分寺境内より東に落ち込む地形があり、土層よりすれば、そこは湿地であった。その後、漸時堆積して現在の宝林寺の敷地となつたのであろう。

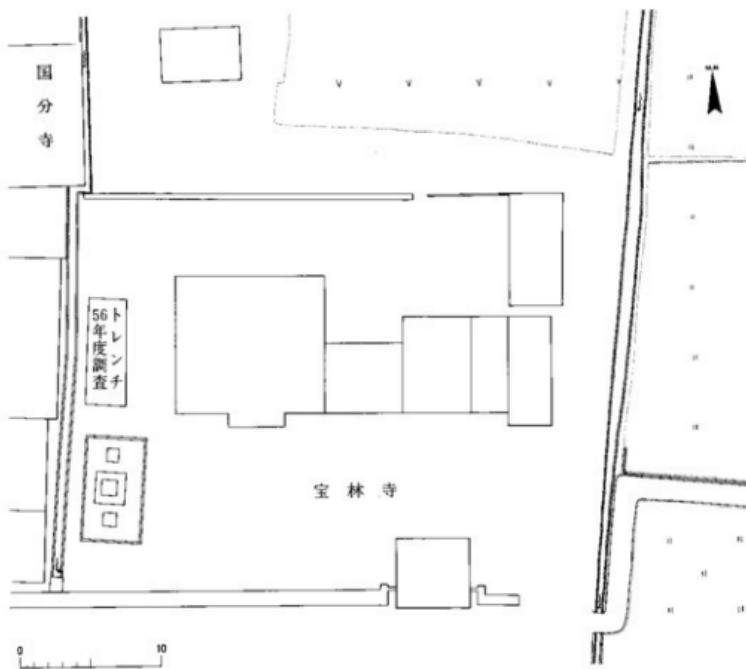
(廣瀬常雄)



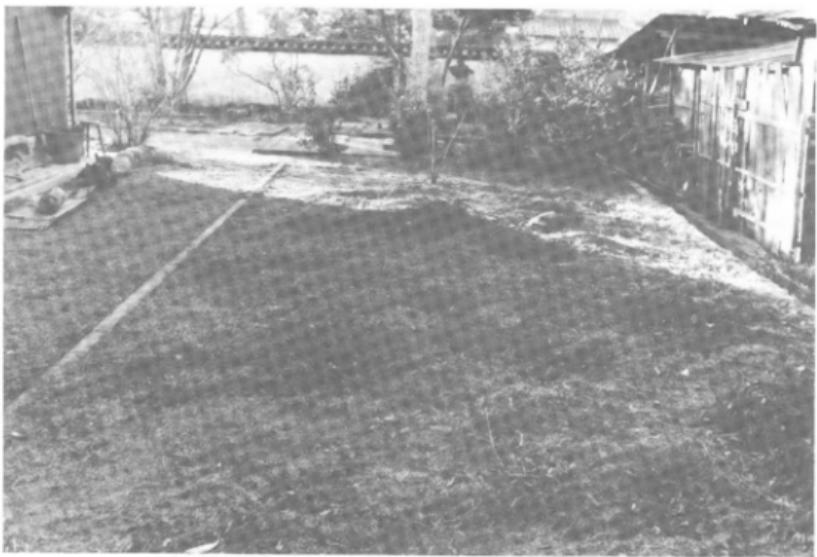
第2図 土層図



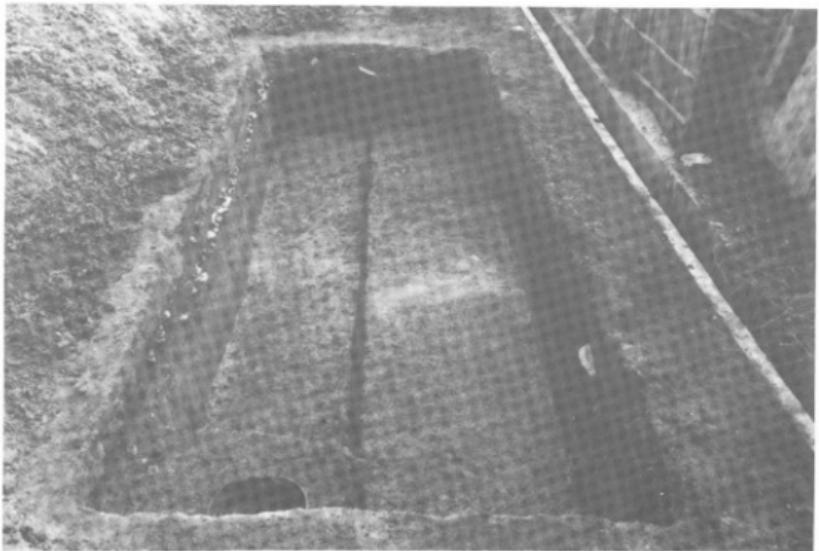
第3図 瓦拓影



第4図 宝林寺周辺測量図



第5図 発掘前の全景（北より）



第6図 発掘後の全景（北より）

# あま 天 ぎり 霧 じょう 城 跡

調査の経過 城跡は丸龜平野北西部の天霧山頂を中心として展開しており、行政区画は善通寺市、多度津町、三野町に及ぶ。安山岩採石により、現状が著しく損われる可能性が生じた東方尾根部を対象として、昭和56年4月20日より8月26日にかけて発掘調査を実施した。調査に際しては天霧城跡調査団を組織した。

遺跡の概要 天霧山は標高380mを計り、四方に尾根を伸ばしている。城跡はその急峻な地形を利用して、尾根筋に配された郭などの施設からなっている。今回の調査対象地区は東方尾根部の標高305~320mを計る区域である。

遺構 調査の都合から、東より第1郭、第2郭という具合に郭名をつけた。各郭とも地山の削平とその際に生じた破碎礫を石垣の上に積み上げることで郭上面の平坦部の面積を確保している。削平はほぼ完璧と言える程に行われており、郭上面に露頭する削平し残した岩脈は石塁の基部として利用するために計画的に網張り段階から残されたものである。

郭は東端の第1郭から西部の第8郭まで確認され、各郭には各々その性格を反映したような施設が検出された。第1郭では北部に石塁、南部に第2郭との通路と考えられる緩斜面部があり、近世以降の神社のものと考えられる礫石と棚状の配石がある。第2・3郭間には浅い掘り切りがあり、南斜面部にはそれに連なる通路が検出された。両郭には掘り切りに接して樹形状の石塁が配されている。第2郭と第5郭には建物の礎石が検出された。第6郭の西には浅い掘り切りがある。掘り切りからは他の郭へ連なると考えられる通路状部が北西へ伸びる。第8郭は今回調査した他の郭とは異り、丸龜平野の中央部を向き、郭上面の縁辺に柵列に伴う根石と考えられる小礫群が配されている。第8郭の北部には腰郭とも考えられる小郭がある。この小郭へは第7郭上部から斜面に沿って通路状遺構が伸びる。

遺物 各部から出土する遺物は質的にはそれほどの差はないが、量的には第2・3郭が多い。

まとめ 発掘調査区は城跡中の一尾根部のみにすぎず、東方尾根郭群の性格などについては他の尾根の調査を待つ必要がある。なお詳細は「天霧城跡発掘調査概報」を参照されたい。(藤好)



第1図 東方尾根の位置 (1:25,000)

第2図

調査区遠景

(北西から)



第3図

第1郭 西部

(北東から)



第4図

第2・3郭

(西から)





第5図

第2・3郭 北斜面部  
(東から)



第6図

第5郭 磚石検出状況  
(西から)



第7図

第8郭 北部石垣  
(北東から)

# 黒島林7号、8号墳

## ① 調査の経過

黒島林古墳群は母神山古墳群の一角を占める。7・8号墳は、母神山からゆるやかな弧を描いて北西に延びる丘陵上に位置し、標高65~70mを測る。陵上には四基の古墳が存在したが、下方に位置した5・6号墳も今回同様の宅地造成工事によって記録保存されている。周辺には多数の古墳があるが、開発は急テンポで進んでおり、早急な対応が必要となっている。調査は昭和56年8月6日より10月17日まで実施した。

## ② 遺構について

7号墳はかって途中まで調査がおこなわれたということで、石室掘り方もはっきりと検出された。主体部は主軸をN=58°-Eにとり尾根にほぼ直交して南西に開口した両袖の横穴式石室である。玄室から墓道に延びる排水溝とふた石、閉塞施設が検出された。

8号墳は、主軸をN=20°-Eにとり、ほぼ尾根に直交して南南西に開口する片袖の横穴式石室である。盜掘により玄室・羨道の側壁が著しく損壊していたが、床面はかなりしっかりとていた。調査の結果、礫を敷設した床面は2次にわたることが確認された。奥壁最下段の石は長さ1.95m・幅0.8m・厚さ0.25mの巨大な切り石であり注目された。7・8号墳ともに石材の大半は砂岩の転石が用いられていたが、一部に凝灰岩もみられた。

## ③ 主な遺物

7号墳からは鉄器・土玉・ガラス小玉・耳環・須恵器が出土したが、量的には僅少であった。8号墳からは須恵器・鉄刀・馬具・鉄鎌・耳環・ガラス玉・土玉などが出土した。奥壁際から三本の鉄刀が一括出土した点は注目される。

## ④ まとめ

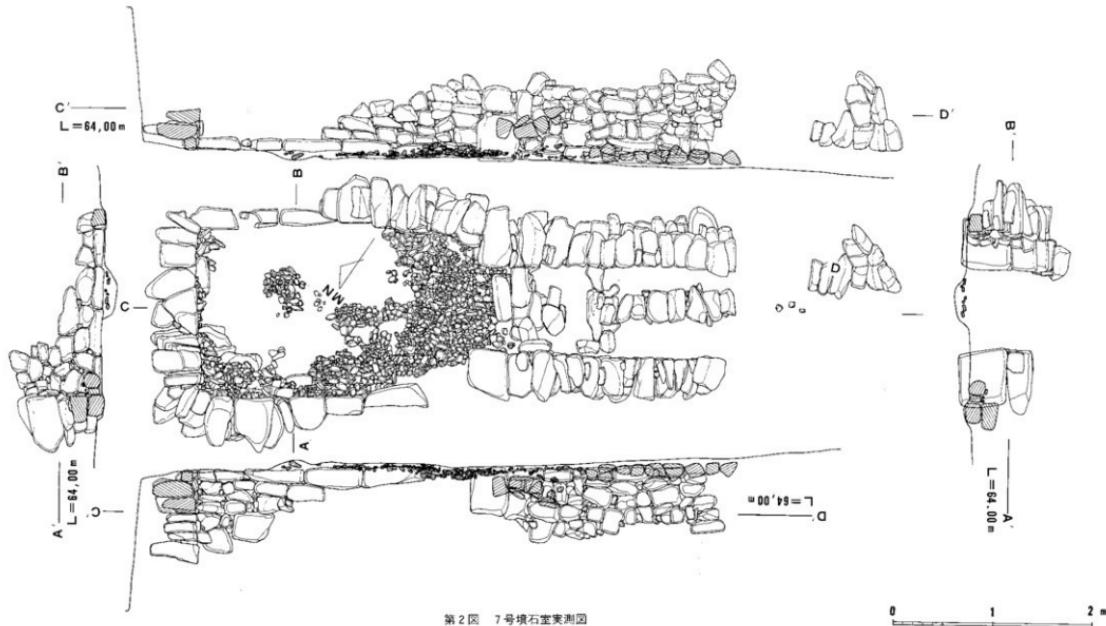
7・8号墳ともに出土した遺物から6世紀後半~7世紀末頃に比定される。

なお、本調査の報告書は黒島林古墳群発掘調査団から刊行される。

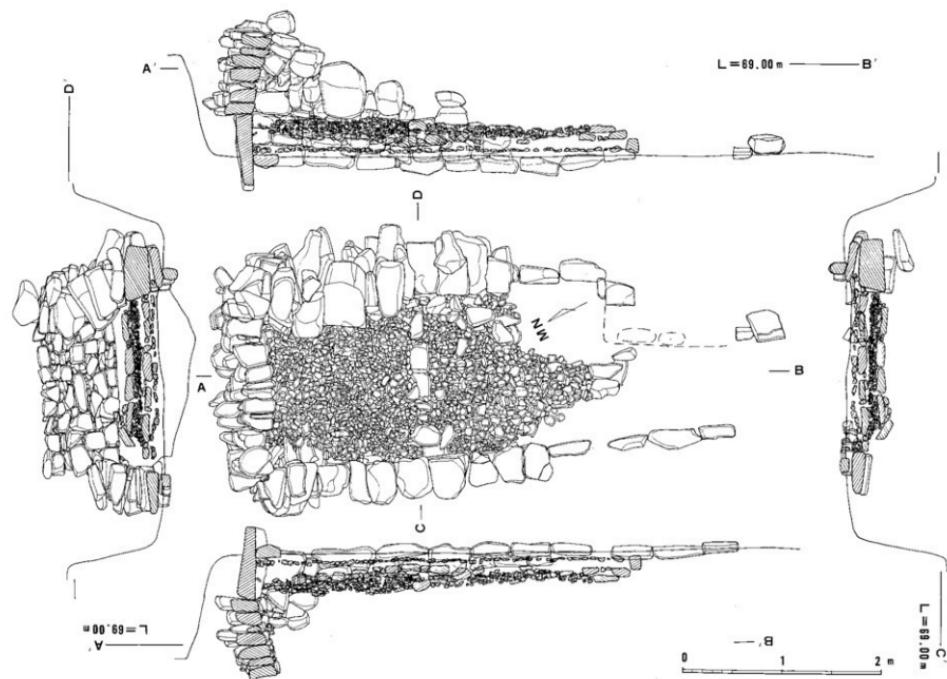
(齊藤賛一)



第1図 黒島林7号・8号墳位置図(1:25,000)



第2図 7号墳石室実測図

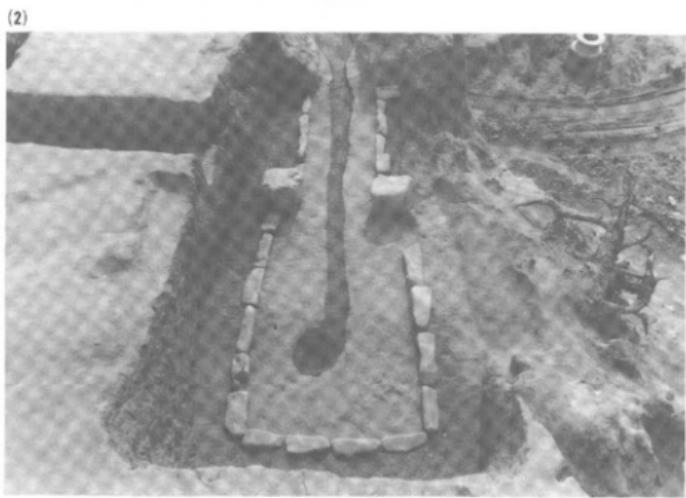


第3図 8号墳石室実測図

(1) (2)  
7号墳根石  
(北より)  
(南より)



(1)



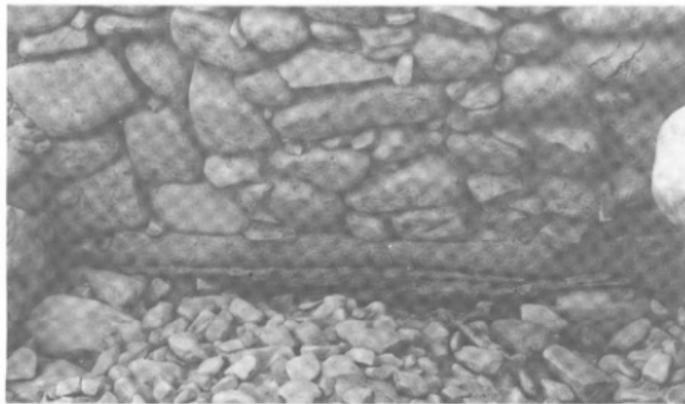
(2)

(1) (2)  
8号墳  
石室  
(南より)



(1)

(2)



# わ さ じま 羽 佐 島 遺 跡

## (1) はじめに

羽佐島遺跡の発掘調査は、昭和52年の予備調査、昭和53・54年度の本調査で実施され、旧石器時代を中心とする膨大な遺物が出土している。各年度の調査概要はすでに報告されているが、本格的な整理作業はまだ行われていない。しかし56年に基礎的な整理を一部行なうことができたので紹介したい。

56年度の作業は、25万点以上に達すると考えられている遺物の水洗い、時代別分類、重要遺物の注記、基礎的分類及び、一部の実測である。その結果、5,700点以上にも及ぶナイフ形石器が確認されたのをはじめとして、舟底形石器約50点、

尖頭器約130点、細石核70点以上、翼状剥片石核を含む横長剥片石核約1,300点、叩き石約150点、石鎌約1,100点など、多数の石器・石核・剥片が確認できた。

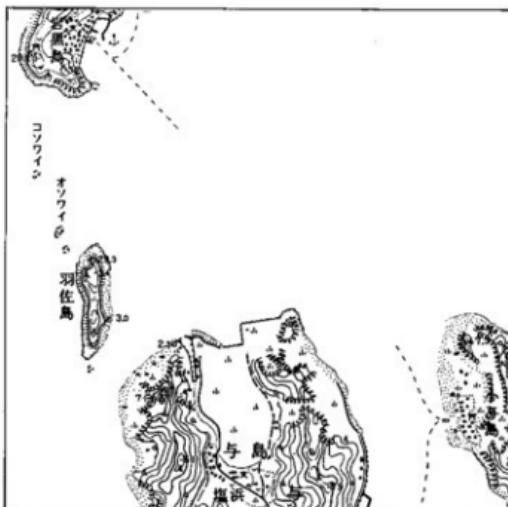
これらの膨大な旧石器時代遺物はほとんどが未整理で、今後順次整理し、報告してゆかなければならぬが、これまでの作業によって比較的の整理の進んだ黒曜石製遺物・玻璃質安山岩製遺物について、ここで取上げる。

## (2) 遺物の出土状態

黒曜石製遺物は2点の採集品を含めて34点出土し、細石核2・細石刃5・ナイフ形石器2がある。

このうち、細石核2・細石刃2を含む17点は、調査地区南端部の $16 \times 8\text{ m}$ ほどの範囲に集中する。ナイフ形石器2点は単独出土である。

出土グリッドの明らかな玻璃質安山岩製遺物は548点あり、原石8・細石核素材8・細石核54・細石刃36・ナイフ形石器10・尖頭器1・楔状石器5・スクレーパー4・二次調整ある剥片8+α・(横長剥片)石核5・剥片や碎片409-αが含まれる。他に表探の(横長剥片)石核1点などがある。



第1図 羽佐島遺跡の位置 (1 : 25,000)

これらは、調査区南端部、中央部、北部の3ヶ所に集中し、中央部はさらに3ヶ所の集中地点に分けることができる。5ヶ所の集中地点は規模も一定せず、各遺物の出土層位も一定しないが、しかし、後世の擾乱を受けながらも、平面的に比較的集中していたことは、旧石器時代人の生活の跡をある程度は伝えていると考えられるのではないか。

### (3) 出土遺物(第2図、図版1・2)

第2図1～3は黒曜石製遺物で、1は方柱状を呈する細石核、2・3は小形のナイフ形石器である。3は切出し形となる。2の刃部は左図左上部で、打点の側にある。

4～11は玻璃質安山岩製遺物である。4は横長剝片石核再利用の細石核で、右図上縁部の横長剝片剥離面のリングは、上面の細石刃剥離面によって切られているので、横長剝片は細石刃に先行して剥離されたことがわかる。5は両面加工の尖頭器で、下部を欠失している。

ナイフ形石器(6～9)には横長剝片を利用したものと、縦長剝片を利用したものがあるが、いずれも小形である。10は楔状石器であり、11はスクリーパーである。

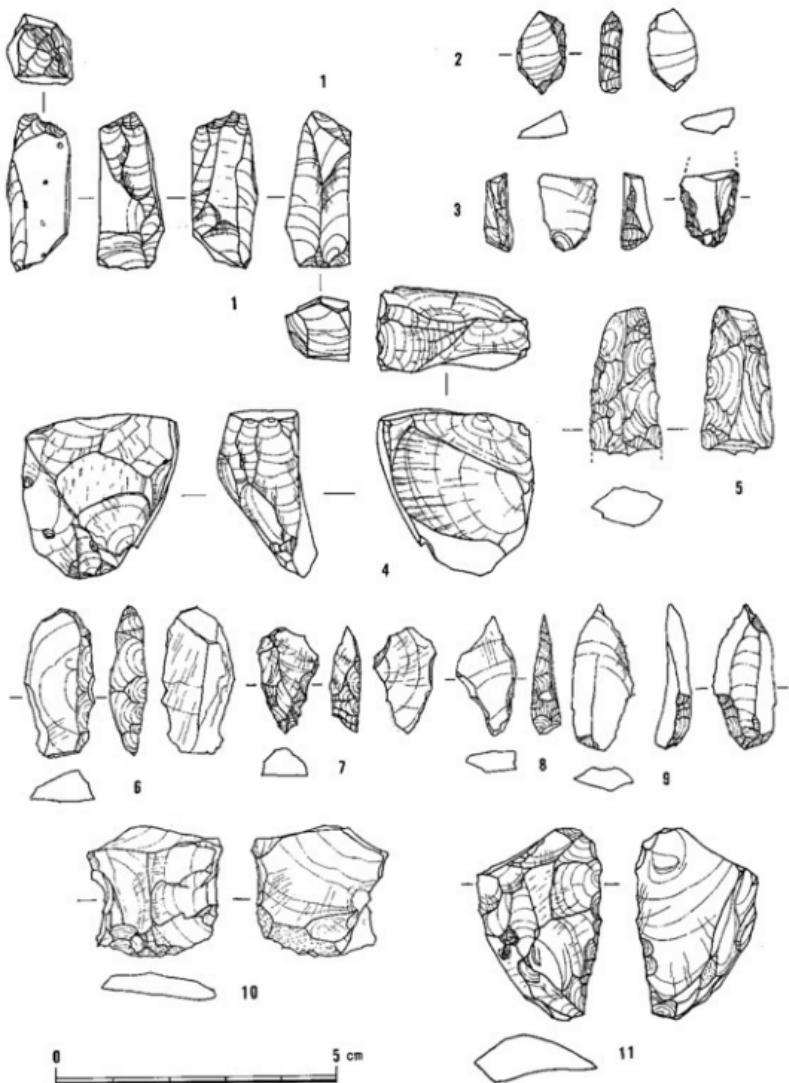
細石核は、I. 角錐(柱)状で、打面と作業面以外に自然面を残し、小礫を半截したか、1原石から1石核を作ったもの。II. 角錐(柱)状を呈し、自然面を残さないもの。打面側からの打撃を主体とする側面調整が認められる。III. 角錐(柱)状を呈し、側面の一方に自然面、一方に大きな分割面を残すもの。IV. 板状を呈し、側面の一方に自然面、一方に大きな分割面をもつもの。V. 板状を呈し、原則として両方の側面に大きな分割面をもつもの。VI. 板状の小剝片ないしは不定形の剝片を利用したもの、に分類することができるようである。Iの側面調整は顕著でなく、II～Vは側面調整を持たないものも多い。總じて、側面調整は貧弱で、その有無は大きな差異とならない。

羽佐島遺跡では小礫から少くともII～IVの細石核を同時に生産するシステムがあるようである。また、小形横長剝片を利用した、井島型ナイフ形石器は、第2図4を介して細石刃と一部が共存する可能性が強い。

一方、羽佐島遺跡では玻璃質安山岩を利用した国府型ナイフ形石器や、いわゆる宮田山型ナイフ形石器は出土せず、縄文時代の石器もみられない。だとすれば、これは細石刃文化期にのみ使われた可能性が高く、この石材で作られた石器は旧石器時代最終末に位置づけうるものと考えられる。

なお、詳細は今年度の海峽部調査概報で紹介しているので、それを参照されたい。

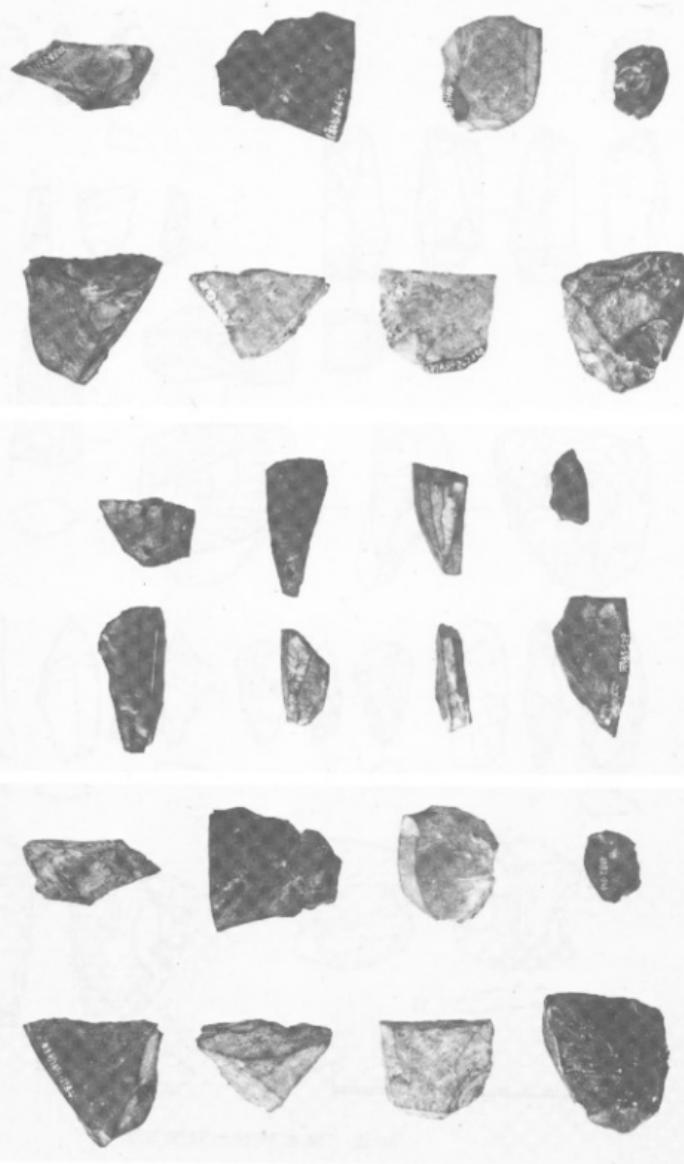
(渡部明夫)



第2図 羽佐島遺跡出土石器実測図

圖版一

(1) 玻璃寶安山著製細石核



(2) 同上 (作業面)

(3) 同上 (裏面)



(1) 玻璃質安山岩製ナイフ形石器・尖頭器



(2) 同 上 (裏面)



(3) 玻璃質安山岩製スクレーバー・楔状石器



(4) 同 上 (裏面)

## 第4回埋蔵文化財発掘調査報告会

香川県教育委員会では、埋蔵文化財調査や遺跡の状況などを広く一般の方々に周知するとともに、文化財保護精神の啓蒙をはかることを主目的として、昭和53年度から埋蔵文化財発掘調査報告会を開催してきた。第4回を迎えた今年度は、高松市教育委員会の共催を受け、文化財保護強調週間（第28回・昭和56年11月1日-7日）に寄せて、11月8日高松市民文化センターにおいて開催した。報告会の次第は、次のとおりである。

- 12:30 - 13:00 （報告）「最近の発掘調査の概要」 伊沢肇一  
13:00 - 13:20 （講話）「中世の膳」講師・高知女子大学教授 岡本健児  
13:20 - 15:00 （報告会）「中世の讃岐」-発掘調査から-  
助言者・高知女子大学教授 岡本健児  
四国学院大学教授 国島浩正  
司会・松本豊胤  
出席者・秋山忠、広瀬常雄、大山真充  
15:00 - 16:30 （講演）「仮面」-信仰と芸能-  
講師・国立民族学博物館研究員 中村保雄  
16:30 閉会行事

「最近の発掘調査の概要」では、昭和55～56年度にわたる緊急・確認調査や大規模な受託調査などの最近の動向を、調査の概況・調査上の課題等をおりませながら紹介した。昭和56年度調査の概況については、本書巻頭に掲載している。

「中世の膳」は、中世遺跡の調査成果と文献や絵巻物に登場する中世の食生活とを巧みに絡ませた、岡本先生の造詣深いお話であった。先生は、考古学者の見る中世の膳について語りたいと前置きされたうえで、絵巻物をとらえたスライドを併用しながら中世の膳の在り方を説明された。特に、膳に並ぶ食器のセットである塊と皿について、中世を通じて上等の食器として重視されたのは土師質土器の系譜であるとし、次いで塗り器があり、一般には瓦器や山茶塊の類が用いられていたことを事例をあげて説明された。まことに興味深く拝聴した次第である。日程の都合上、きわめて短時間のお話になったことが残念でならない。

さて、「中世の讃岐-発掘調査から-」は、これまで県内で行われた中世遺跡の調査成果に基づいて「中世の讃岐」を少しでも浮き彫りにしてみようという試みであった。決して大上段に構えるつもりはなかったが、シンポジウム形式による報告会は、われわれにとって初めての試み、相当な不安があった。十分な議論が展開できるだろうか、参会者のご理解が得られるだろうか、等々。幸い、岡本、国島両先生の適切なご助言を頂きながら1時間40分ほどを経過した。

松本の司会のもとに、秋山はここ数年の中世山城跡（天霧・勝賀・昼寝城跡など）の調査を、広瀬は中世の集落を物語る西村遺跡の調査を、大山は備讃瀬戸の海峡部（櫃石島・与島など）の調査を主として取り上げ、中世の讃岐の様相に迫ろうとした。確かに、議論のかみ合わない箇所もあったが、岡本先生には考古学的見地から、国島先生には文献に立脚した讃岐の中世史の視点から種々有益なご助言を頂き、どうやら一応のまとまりをみたようである。もちろん、こうした、報告会への取り組みについて、検討すべき多くの問題点も見つかった。ぜひ、今後に生かしたい。

このあと、中村先生の「仮面—信仰と芸能—」と題する講演が行われた。さすがに、多年のご研究でこの方面的権威である先生の、多数の仮面をスライドで紹介しながらのお話には、聴衆を十分に魅了するものがあった。いつのまにか仮面の世界に引き込まれていったような気がする。

なお、当日の参会者は約100名、そのうち県外の埋蔵文化財調査の関係者が約30名であった。この点、もっと広く県内の方々に報告会の開催を効果的に周知するとともに、会の内容についても十分な検討を加えなければならない。

（秋山 忠）



報告会「中世の讃岐」から

## 文化行政課埋蔵文化財調査担当者名簿

総括課長 笹川高美

課長補佐 前田治衛

副主幹 松本豊胤

庶務係長 下河芳樹

主任主事 小国史郎

主事 建島一子

" 増田宏

職員 神明子

" 久保美栄子

調査一係 係長 伊沢肇一

主任技師 斎藤賢一

技師 廣瀬常雄

" 林正弘

" 藤好史郎

嘱託 大砂古直生

" 玉城一枝

調査二係 係長 秋山忠

所長(嘱託) 増田正伯

主任技師 竹下和男

" 渡部明夫

" 森本義臣

技師 東原輝明

" 大山真充

" 安田和文

" 真鍋昌宏

嘱託 白木清

" 町川義晃

" 田村雅彦

" 坂口淳子

香川県埋蔵文化財調査年報  
昭和56年度

昭和57年3月31日

編集発行 香川県教育委員会  
高松市番町4丁目1番10号  
☎ (0878) 31-1111㈹

印刷 株式会社 多田印刷所  
高松市八坂町1番地7